

そこからさらに広東の方へ陸路二二〇里をテクテク歩き、広州南方のデルタ地帯へ出ました。行っても行ってもクリーク地帯みたいな珠江の流域に展開しました。

そこで鐘馗兵団（第百三十師団）に名前が変わり、先発隊に入れられ、鯨兵団との交代を孫文の生まれた中山県付近で行い、百三十師団の編成を終わったわけです。

それから、マカオの周辺で山の形が変形するほど陣地構築をしまして、比島占領後の敵前上陸に備えていたとき、終戦となりました。

引き揚げてくる時も主計下士官でしたので、船の中ではみなさんの上陸地における復員者へ二〇〇円の支給のため書類作り、経理関係の帳簿整理に追われた。

浦賀へ向かう復員船で病人（腸捻転）が出て、手術用の水を多量に使い、水不足のため急遽、鹿児島に上陸することとなり、三月三十日、鹿児島に着き、長崎に近いと喜ぶ反面、四中隊で浦賀に向かった同年兵は四月四日に復員して恩給が支給され、大隊本部にいた私と同中隊出身三人が恩給欠格者です。

帰りましても、運送店は合併、合併で大きくなり、以

前使っていた者が上司となり使われる身の辛い思いをしました。満州から引き揚げてきた兄たちも養いました。

親から引き継ぎました運送屋は、私一人が最後までやりとげ、停年を迎えました。

中支常徳作戦の思い出

静岡県 小林 年 男

私たちの部隊は柄田支隊として、十三軍から一個大隊抜き出されて第十一軍の作戦援護をしたのです。

昭和十八年十月、部隊は急に兵器検査だ、被服検査だ、馬匹検査だとあわただしくなつたのです。何かあるなど予感がしていたのですけれど「部隊は作戦に向かう部隊の警備地区へ交替して警備につく」と言い渡されました。

私は大隊砲の一番砲手でしたが、軍装検査のとき、靴が痛んでいたので申し出ましたら「これを履いていけ」と、十二文の新品を渡されたのです。大き過ぎて、靴の中で足がガタガタ動くけど、つきはぎの靴よりましだと思い

ました。

十一月三日の明治節だったと記憶していますが、部隊は徐州から汽車で南京の対岸浦口へ着いて、今度は船で揚子江を遡航して漢口に向かったのです。漢口からはまた汽車に乗って、孝感という駅で下車して部隊は集結したのです。沙市まで、応城、沙洋鎮を通過しながらトラック輸送で、馬に足を踏まれたり、体を押しつけられたり、ずいぶん苦勞をしました。

一般に軍隊は兵営内では厳しく、古參兵はいばって、新兵は何でもやらなければいけないが、作戦中は古兵も新兵も全員協力して戦闘すると思っていたのです。ところが、兵営内と変わらないので、新兵が何から何まで全部やらなければならない。

宿営の時は炬を作り、その周りに藁を敷く、夕食を作る（民家の釜を利用して）。副食を探して調理する。食事の後片付けをし、全員の水筒に湯をつめる。古兵の多くは上げ膳、据え膳で手伝ってくれない。

それと馬や兵器の手入れが大切な仕事です。砲の手入れをしてから、夜は不寝番につく。馬は生きもの、大事

な戦力、自分のことは後回しです。馭兵は、馬屋に入ると「かいつけ（馬の食事）」をやり、水を飲ませ、食事は兵隊と同様二食分作って、かいつけ袋につめる。鞍傷（鞍ですれて馬の背中がはれる）ができた馬はチャンチュウ（中国の焼酎）で冷やしてやったり、鞍傷に当たる部分の鞍下毛布を切り抜いてやった。蹄鉄を点検し、不良のものは蹄鉄工に処理してもらうなど。まるで敵と白兵戦でもやっているような忙しさです。

昼は行軍、戦闘、夜は平均二〜三時間しか眠れない。靴下へ詰めた米は古兵のから使用するから新兵の装具はいつまでも軽くない。砲手も馭兵も睡眠不足になやまされた。行軍中、行進が止まると、決まって前の馬の尻に頭をぶっつけて止まる。一步、一步足を運んでいる感覚はなくて、無意識に機械的に足を動かしているのですよ。

或る時など、行軍で止まっていると付近の景色がだんだんと変わり、富士山が見え（私は毎日富士山を見て育ってきた）、故郷の兄や母の顔が見えた。なんでここにいるのかなと思ったら、「前進しているぞ、何をしている

か「大声にハッとしたり、二〇人ぐらい前からみな止まっている。私も大声で前へ通伝した。皆立ったまま居眠りをしていたのです。ですから、行軍中に敵と出くわさないか、など期待する。戦闘が始まれば伏せられるからです。」

ある日、先兵の方向で戦闘が始まりまして、「大隊砲前へ」、砲を馬からおろし、私は一番砲手ですので、分隊長と砲との中間を進みました。「射撃用意」「標桿の方向 砲すえ」などと次々に号令がかかる、射撃が始まりました。岩井分隊長は常に砲側について細かく指図をしているので、私は何も連絡することがない。

砲が陣地進入すると、私は弾薬手と同じ位置に伏せていたんですが、毎日の睡眠不足のため眠ってしまい、気がついたら砲はもう三〇びぐらい前に進んでいるのです。「敵の迫撃砲が逃げていく。大隊砲早くしろ」と曹長が叫んでいる。射撃準備が終わったら敵の迫撃砲は稜線から姿を消していた。また曹長の雷が落ちた。「大胆と言おうか、弾丸雨飛の中で居眠りをしている馬鹿ものがない」と、私も名指しをされた仲間に入っていたのですが。

兵隊はだんだんと色が浅黒くなり、目だけがギョロツと鋭くなり、ひげはぼうぼうとなって、やせていきますね。そうなると兵器の手入れなどはだんだんと簡単になって、炊事の方だけ力を入れるようになる。なりふりかまわないで、一寸した時間でも腰を下ろして眠り、歩きながらも眠れるようになる。禁じられてはいるが、みな馬の尾をつかんで行軍するようになりました。

ある日、一面の平野を行軍中、右方の山の上空から敵P51が機銃掃射しながら飛んできた。全員瞬間的にパツと散った。驚いてあばれ出す馬を制止するが、砲身馬は一番元気のあるのを割り当てられているため、馭兵を引きずるように走りだす。私も馬のあとを追うなど大騒ぎです。我々、特に馬部隊は飛行機に弱い。蜘蛛の子を散らすように退避する格好の悪さ、あとで一人で苦笑しました。それ以来、毎日敵機に悩まされ通しです。

行軍中、河の端や島などに敵の遺棄死体が点々とあるのですが、どの死体も腹がふくれて、風船のように丸くなっていました。

私は、どういうわけか、昼の行軍より、夜の行軍の方

が楽だった。昼は歩く景色が変わって、これだけ歩いたと分かるのですが、夜は距離感覚がなくて、ただ歩いているだけで、いつのまにか相当の距離を歩いてしまうからかも知れませんでした。またP51の襲撃がなかったからかも知れませんか。

第三師団が通った後には草も生えないと言われた幸部隊の通った道を、私達の柄田支隊は進んで、石門の渡河点確保の警備の任についたのです。

そこには至るところ所障地の跡が見え、道にも畠にも地雷が埋めてあって標識の白い框（わく）が点々とあり、文字通り薄氷を踏む思いで、前の兵の足跡に自分の足をのせて進んだのです。前進中、突然大爆発音が聞こえ、部隊は地雷地帯の中で停止しましたら、「機関銃隊の将校の馬の腹のところをふっ飛ばされた」などという話しがだんだんと伝わってきました。

石門北方の敵へ接近して、夜中から払暁攻撃をかけてきた。私の右五ヶ月前にいた柄田支隊長が「味方山砲が射ってきた。擲弾筒は信号弾黒龍を上げろ」と叫んだのです。私達の約五十ヶぐらい前方へ三発ほど爆発したのが日本

軍の山砲弾だったのです。私の前方三十ヶぐらいのところでは黒龍が高々と上がって、黒いまがりくねった煙を引いて落下していたので友軍の砲撃は止まりました。

この時の戦闘で、敵の少年兵を捕虜にしたのですが、我々があまりにも急な攻撃をしたので、仲間が逃げたままだったのも知らず「モシモシ」と一生懸命やっていたらしいのです。この少年は悪びれず、無邪気で、その後徐州へ帰ってから部隊長の当番兵とし可愛がられていました。

この戦闘の後、支隊は渡河をして常德に向かって前進することになった時のことです。工兵の筏に乗って次々と対岸に進んだのですが、我々の歩兵砲隊が渡り始めた時、P51が銃撃してきました。前の筏は一瞬早く岸へ着いて上陸してしまいましたが、私達は馬を積みこんで漕ぎ出した時だったのです。遮蔽物がないので、運を天にまかせて対岸まで漕いだのですが、なんと幸運にも敵の機銃弾は私の筏をまたいで落下したのです。

作戦中、支隊は羊毛灘という所で宿営したのですが、目指す常德まで四ヶぐらいの所だとのことでした。その

朝、友軍機が通信筒を落としていった。それによって、部隊は反転して佐々木部隊（第三十四師団より抽出）が包囲されているのを救援に向かったのです。支隊は石門で休養したので、みな元氣を取り戻していた。

戦闘らしい銃砲声がかんに聞こえてくる。切り通しや、山陰にへばりついている佐々木隊の兵隊を収容したりして、大隊砲は松林の中に陣地進入して、間接射撃を始めたのですが、敵の機関銃は間断なく射ってくる。

「分解搬送」と分隊長は号令をかけて前の山へ前進していきましたが、車輪の片方と弾薬箱が置いたままなのです。一刻の猶予もできないので、とっさに、本当にとっさに、私は弾薬箱を背中に背負って、その上に車輪を載せ、左手で背中の車輪をおさえ、右手で携帯箱、標桿を持って全速力でかけたんです。

「車輪は何しているか」と、どなっている。敵機関銃は私一人を狙って射ってくるので、死んでたまるか、と齒をくいしばって山を降りて、向こうの山裾の大隊砲の横に伏せるように倒れ込んだ。「もたもたするな、馬鹿もん」と分隊長に横腹を蹴飛ばされたのです。私が怒ら

れることは少しもないと思ったが、軍隊という所はそういう所だと思い、よくぞ他人の分まで、三人分を運んだ、と氣をよくしましたよ。後日、徐州で持ってきたのですが、とても動くどころか、車輪を載せることもできませんでしたので、俗に言う火急の時の糞力というやつでしょう。

この半日の戦闘で佐々木支隊救護はできたのですが、斉藤副官が狙撃され戦死、他にも多数の負傷者が出たようです。

またこんなこともありました。ある日夜行軍をして、だんだんと夜が明けてきて、左手を見ると、我々と同じ方向へ行軍しているのが敵なのです。約五〇㍎ぐらい離れて、並行して歩いているわけで、ドキッとしたけれど、両軍ともあまり接近していて、戦闘になるキッカケがなく、緊張したまま強行軍している。そのうち石門が近くなるにつれて、敵は遠ざかって姿が見えなくなったのですが、あれはどうす気味悪いことはありませんでした。反転作戦でも、激烈な戦闘が続いて、歩兵砲があまり敵に近づいたので零距離射撃（砲口で爆発させる。いわ

ゆる距離ゼロ以)で撃ちまくるなどの乱戦に乱戦を重ねたこともありました。

柄田支隊長は「余は最後尾に在り」と反転したのですが、「歩兵砲は前の敵を制圧せよ、だれか外套を落とし、たものはいないか、日本軍の恥になるから装具はしっかり持って行け」と部隊長はただ一人で、兵隊の外套を頭からかぶって歩いてくるのです。敵弾はチュンチュンと部隊長の方へ飛んでくるが、ゆうゆうと部落の中へ入ってきた。暗くなった兵隊の気持は、この姿を見て明るさを取り戻したのです。

作戦が終わって、柄田支隊が感状を受けた。

『柄田部隊は、長駆徐州から作戦に参加し戦場に到着するや、よく軍の右側背を掩護し、石門及び其の附近の要点確保に際しては、数次出撃せる敵をよく撃退し、佐々木支隊が苦戦におちいるや、よく之を援護し、副官齋藤中尉を始め多くの犠牲を出したにもかかわらず、勇戦よく敵に殲滅的打撃をあたえ、之を潰走せしめ、反転に際しては、陽林子方面に行動し、側面より反攻を企図したる適増援二個師を攻撃し、敵に多大の損害を与え、その

企図を放棄せしめ、軍の反転を容易にする等、軍の作戦行動に大きく貢献した』

これが第十一軍司令官横山勇中将からの感状の要旨ですが、私たちが駐地徐州に帰ったのは、昭和十九年二月十一日でしたから、ちょうど一か年間でした。

大東亜戦従軍回顧談

山形県 赤間 清吉

私は昭和十七年十二月一日近衛第二連隊へ入隊を致しました。

其の当時の私の家族の状態は、農地が五町歩強あり、そのため労働力の必要から早く妻をめとりました。

私が二十歳、妻が十九歳でしたから私が入隊の時は、妻は既に妊娠しておりました。その当時の国内の情勢としてはお国のためにすべてを捧げて国民の義務を果たすこと「男子の本懐」で勇躍入隊をした訳であります。

入隊後一週間経た時に家族との面会が許可されるから